「単純、簡明に書くことの強み」

自分の思いを短い文章で、簡潔に言い表すこと。凝縮されたその言葉の重みが、読者の心を直に揺さぶります。
今回は簡明・簡単な文章が持つ効果、面白さについて、具体的なエピソードに基づきながら、辰濃先生にご紹介いただきました。

辰濃 和男
●ジャーナリスト、朝日新聞「天声人語」元筆者

体調を崩して病床にある間、見るともなくテレビを見ていたら、「仲間たちで作った成人式」という実録を放送していた。だらしない話で申し訳ないが、何局のテレビかもわからない。二十歳の若者たちが仲間で相談し、式のプログラムを決めてゆく姿が画面に映し出されていた。元番長とかいわれたイカツイ若者に仲間が「相談」にゆくところがおもしろかった。元番長は「式の間、騒ぐやつがいたら、おれが必ずとめてやる」と約束してくれるのだ。

本番の成人式で「みんなの主張」の時間になると、一人の若者が手をあげて壇上に立った。若者は「おれは・・・」といいだして、感極まったのだろう。顔を大きく歪め、手放しのままぼろぼろ泣きだした。そして「おれは、おれは、××ちゃんと結婚するぞォ」と叫んだ。「ガキもできるんだ」。客席で相手の××ちゃんが立ち上がった。拍手が沸き、ざわめきがあった。

よかったのは「結婚するぞォ」という、きわめて簡明な、意味の深い言葉の重みだった。私なんかが「文章は簡単、簡明であれ」と説いても、この「結婚するぞォ」のひとことの重みにはかなわない。

話が変わるが、昭和の初期、二・二六事件というのがあった。丹羽誠忠中尉たちは叛乱罪に問われ、死刑になった。叛乱罪という罪は重い。が、事件に参加した若者たちは、それぞれ生身の人間だ。妻を残して旅立つ無念はいかばかりだったか。丹羽中尉はこんな短い走り書きを残している。

「死ぬる迄恋女房に惚れ候」。

私がいいたいのは、その文が簡明であればあるほど与える感銘も深いということだ。自分の思いを伝えるには、文章をこそぎおとし、こそぎおとし、簡潔にすることが肝要で、だらだらとしたものであってはならない。

作家の中野重治はこう書いている。

「私は単純に書きたいと思っている。なるべく短い文章で書きたい」

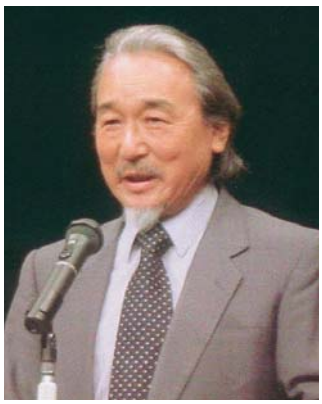
文の長さはどのくらいが適当か。書き手の好みによって違うから一概にはいえない。野坂昭如の『火垂るの墓』冒頭の文は三百字ほど一度も句点がない。恐ろしく長い文だ。でもそれは野坂独特の文体だから、とやかくいうことはない。ただ、名人芸をもたぬ人がこれを真似ると、火傷をすることになる。

私自身は現役のころ、新聞のコラムを書く時、文の長さの目安を平均三十字から三十五字においていた。

◎

最近、広告界の異才、箭内道彦の『87156 9』を読み、短文のおもしろさを改めて教えてもらった。

- ●新人の役割は旧人を刺激すること。
- ●みんな何かの天才なんだ。
- ●両岸を旅せよ。
- ●日々是遺作。
- ●苦い思いをしたら、ネタができたと考える。



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。